

# カントリー・ミュージックと京都に関する オートエスノグラフィー

「ケア」とも呼べるな関係性に注目して

シンポジウム「ライブミュージックと地域社会」  
長崎県立大学シーボルト校 2025年12月7日  
関西大学社会学部メディア専攻 永富真梨  
[nagatomi@kansai-u.ac.jp](mailto:nagatomi@kansai-u.ac.jp)

# イントロダクション



サエキけんぞうの京都音楽グラフィティー  
vol.19 歯科医のカントリー歌手、永富研二さんの巻



# イントロダクション

ライブハウスやライブミュージックに関する研究=ファンでも演者でもない「身内」と呼ばれるような、スタッフなどが不可視化（生井 2022, 75）

- ・ケアの視点 キャロル・ギリガン『もうひとつの声で－心理学の理論とケアの倫理』をきっかけに人文社会学に大きな影響
- ・ケアの倫理：「女性たちが主に担ってきた、担わされてきた役割、労働、活動が、経済的にだけでなく、社会的、そして政治的にも評価されずにきたのかを探」りながら、「ケアという営みは、人間にとって」不可欠であることを見出すこと（岡野 2024, 3）

# 発表内容

- 1：ライブミュージックに関する先行研究
- 2：ケア的な関係を重視する京都のカントリー
- 3：女性たちのケア労働
- 4：葛藤
- 5：まとめ

## 2：ケア的な関係を重視する京都のカントリー

- ・ケニーズ  
福祉団体とのつながり  
チャリティコンサート



2011年東日本大震災チャリティコンサート

<http://kyoto-daisakusen.jp/wp-content/uploads/2011/06/230626-0401.JPG>

## 2：ケア的な関係を重視する京都のカントリー

### ・京都オーブリー

京都を中心に関西で活動するカントリー やブルー グラスのアマチュアバンドが出演

大きな舞台で演奏して、カントリーとブルー グラスの演奏に対する姿勢や音楽技術を高めてもらうという目的  
売店に京都の福祉団体



# 2：ケア的な関係を重視する京都のカントリー

## ・カントリードリーム

アメリカで活躍するカントリー  
やカントリーロックのアーティ  
ストを招いて開かれるコンサー  
ト

2004年からはフォーク音楽のイベン  
トと共に京都市主催の「京の華舞  
台」の中の行事として開催



### 3：女性たちのケア 労働

- ・カントリードリーム  
チケットのもぎり  
パンフレットへのチラシの挿入  
チケット代の受け取り  
来日アーティストのお世話 お  
土産・食事の手配



	イベント	母とマネージャー、バンドメンバーの奥様・パートナーの役割
火曜日	来日アーティスト到着	送迎・食事の手配・愛想振りまく
水曜日	ケニーズでリハーサル	送迎・お土産・食事の手配・愛想振りまく
木曜日	京都のある場所でライブ	送迎・食事の手配・愛想振りまく
金曜日	高槻市の印刷会社で営業ライブ	送迎・食事の手配・愛想振りまく
土曜日	ケニーズでの前夜祭	送迎・食事の手配・愛想振りまく
日曜日	カントリー・ドリーム	送迎・チラシ挿入・チケットもぎり・食事の手配・愛想振りまく
月曜日	お見送り	送迎・愛想振りまく

# 3：女性たちの ケア労働

- ・京都オーパリー  
チケットのもぎり  
パンフレットへのチラシの挿入  
チケット代の受け取り





京都オーブリーの打ち上げ

# 4：葛藤

# まとめ

- ・日本でカントリーがほとんど経済的に成り立っていないこと音楽を語る場は、女性たちによってひ=さまざまな方面へのケア的な関係を重視できる
- ・利潤を追求しないがために、チケットのもぎりや清算、ケイタリングの調整、掃除、そのほかのファンや出演者の方々に対する挨拶や心配りなどは、演者と経営者の身内の女性によって無償で行われる

# まとめ

- ・京都のカントリーがケアを重視→「地域社会への貢献」
- ・そのためのケア労働→イベント自体の信頼度、イベントの継続に必要不可欠であるにも関わらず、ほとんど想像されない
- ・「ケア」は偏在しているが、女性たちが担わされてきたそれは、可視化されてこなかった
- ・不可視化されてきたケアに携わってきた人々の葛藤

# まとめ

- ・「近代市民社会の理想としての自律的な主体に、葛藤のなかでケアする主体は必ずしもあてはまらない。そう考えると、いかに近代が男性中心主義であり続けてきたかが分かる」（小川 2023, 15）
- ・「〈語り〉はケアを生み、〈語りなおし〉は人に力を与える契機となる」（中村 2013, 73-74）
- ・「ケアの倫理は、例外なくひとは他者との応答のなかで、身体的、精神的なケアを受けつつ生きている、具体的でかつ傷つけられやすい存在である事実を認め、そこから社会を構想しようと呼びかける」（岡野 2024, 4）

# 参考文献（一部）

- ・岡野八代『ケアの倫理—フェミニズムの政治思想』岩波書店 2024年。
- ・小川公代『世界文学をケアで読み解く』朝日新聞出版 2023年。
- ・金山智子編著『ケアするラジオ—寄り添うメディア・コミュニケーション』さいはて社 2024年。
- ・キャロル・ギリガン『もうひとつの声で—心理学の理論とケアの倫理』（川本隆史、山辺恵理子、米典子訳）風行社 2022年。
- ・生井達也『ライブハウスの人類学』 晃洋書房 2022年。
- ・中村美亞『音楽をひらく—アート・ケア・文化のトリロジー』水声社 2013年。
- ・永井純一『ロックフェスの社会学』ミネルヴァ書房 2016年。
- ・南田勝也『ライブミュージックの社会学』青弓社 2024年。
- ・宮入恭平『ライブカルチャーの教科書：音楽から読み解く現代社会』青弓社 2019年。

ご清聴  
ありがとうございました